

ガルチェン・リンポチェ伝

「チベット文化研究会」が発行している会報の、2012年10月号から3回に分けて、ガルチェン・リンポチェがご自分の生い立ちについて東京で法話をされたものの文字起こしが載っています。その中で、伝記に関係のある部分を引用しながら、必要な解説を加えます。なお、ほんのすこしですが、文字の使い方や用語を私風に改めた部分があります。緑字が原文で、黒字が私の解説です。

はじめに

この世界に無数にいる生き物の中で、人間は特別な力を持っています。私たちが八有暇・十円満をそなえた人間に生まれることは、きわめて困難です。特に、この世界は釈尊の世界で、素晴らしい世界です。でもその中で、苦しみの多い生き物もおれば、少ない生き物もいます。それぞれの行いによって、苦しみの原因、すなわち

「業」を作っています。この苦しみを解決する方法、すなわち「道」を知っている者もおれば、知らない者もいます。この世界には、世俗の道と教えの道、そのふたつの道があります。

私は世界の色々な国を回っています。それで、善知識というと、何かすぐれた人と思われがちですが、私にはなにもすぐれた特質はありません。チベット語も方言でしか話せません。でも、色々な地域から、仏教への期待があり、教えによってさまざまな問題や苦しみを解決できると思われ、色々なところに呼ばれます。そのときは、

仏教を理解してもらうために、すこしでも役に立つことができたらと、どんなところにも喜んで行っています。



ガルチェン・リンポチェ (Gar Konchog Nyidon Nyima Chokyi Senge) は、1936年 (昭和11年) に、東チベットのカム地方のナンチェン (現在は中華人民共和国青海省玉樹チベット族自治州にあって、「囊謙」と書かれる。青海省最南端でチベット自治区と接する) でお生まれになりました。Google Map で「囊謙」で検索すると、美しい写真がたくさん掲載されています。

子ども時代から共産党進攻まで

私は7歳のときにリンポチェ (転生活仏) に認定さ

れ、お寺に入りました。そこで少しは仏教の勉強をしましたが、諸事情で仏教を学ぶ機会が少なく、修業もあまりできませんでした。仏教に対してとても尊敬し、信じる心を持ってはいますが、努力が足りず、一生かけて修業することはできなかつたのです。

あるときには、自分で自分を甘やかし、ごまかして、修業や勉強したりするのを怠けて遊んで、時間を過ごしてしまいました。その後は時間がなくなり、共産党の軍がチベットにはいつてきて戦争になり、そのときには私も戦場に行きました。

その中で、ときには怒りが起きましたが、自分には因果の理を深く信じる心があったので、どんなときも、これはやるべき、これはやってはいけないと考える心は常にあり、過ちは犯さなかつたと思います。

私も怒りを抑えきれないときがあります。何の罪も犯していないチベットに対し、改革開放という名のもとに軍隊がやってきました。私はそのことに怒りを感じて、戦場に行きました。しかし、そのときも、怒りはありましたが、自分のためという考えはなかつたと思います。



現在のガルチェン・リンポチェは第8世で、第7世は『白ターラー菩薩成就法』を作られた方です。初代はガル・チョディンパと呼ばれ、ジクテンスムゴン大師の法嗣となりました。インドのアーリャデーヴァ菩薩の生まれ変わりであることは、『長寿の祈り』でご存じの通りです。

先代のディクン法王チェツァン・リンポチェが、ガルチェン・リンポチェの転生であることを認定されました。それからはナンチェン王が経済的な面倒を見てくださいました。ロ・ミエル・ゴン寺院で得度をなさいましたが、その際に、ジクテン・スムゴン大師の絵を指さされ、「これが私のラマです」とおっしゃったのだそうです。先代のチメ・ドルジェ・リンポチェが教育係になら

れ、たくさんの灌頂や伝授や教えを伝えられました。13歳のときに、チメ・ドルジェ・リンポチェはマハームドラの教えをはじめられました。また、ロ・ランカル・ゴン寺院でトゥルク・トゥプテン・ニンワ・リンポチェから、ディクン・カギューに関係するすべての灌頂と教えをいただかれました。その後、前行をはじめられ、またナーロー六法の修業をはじめられました。

中国がチベットに侵入したのは1948年（昭和23年）からですが、ガルチェン・リンポチェが戦われたのは、1956年（昭和31年）からのアムドとカムの反乱のときです。この時代、中国共産党は寺院や富農の財産を没収したので、民衆が蜂起したのです。そのときリンポチェは3年間のおこもり修行中でしたが、共産党軍と戦う決心をなさいました。その時代のことについてもときどきお話になりますが、手元にちゃんとした記録がないので、いまは省略します。

獄中生活

その後はつかまって刑務所に入れられました。私自身は戦場に行ったからつかまえられても仕方がないと思いましたが、刑務所に入ったときに、何も罪を犯しておらず、ただ仏教を信仰して教えを弘め、利他のためだけを願っている、とても偉い善知識たちも刑務所に入れられていました。そのとき共産党は、「お前たちはいままで修業して、人のためとか言っているが、修業によって神

通力や超能力があるなら、いまここで起してみろ」と言って、さまざまな拷問をしました。そのとき、私の心の中に疑念がすこし生じました。

刑務所では共産党教育を施され、自分でもさまざまな疑念が生じてきました。それまでは仏教で「正しい善い行いをすれば苦しみはない」という教えがたくさんあり、そう信じていました。しかし、ここでは共産主義の教育があり、いままで学んできた仏教を考える機会になりました。

でも、私たち（修業の足りない者）と、一緒にいる善知識たちとを較べると、まったく違うのです。どんな苦しい状況にあっても、善知識たちはまったく苦しみと感ぜませんし、どんなときでも穏やかで、どんなに苦しくてもいっさい苦しそうな表情を浮かべません。また、修業しても、看守の人たちには見つからず、何をやってもうまくいきました。自分がそのようにうまくいかないのは、自分の努力の足りなさ、修業の足りなさであると、はじめて気づきました。

毎日刑務所では働かされますが、日曜日などはすこし休み時間がありますので、自分もすこしでも善くなれるよう、時間があるときには自分の頭を隠して、看守に見つからないように、心の中でターラ一菩薩の祈願文や真言を唱えたり、瞑想をしました。



リンポチェは22歳で刑務所に入れ、20年間をそこで過ごされました。共産党は、「仏教を捨てて労働者になれば釈放する」と言って迫りましたが、多くの僧は仏教を捨てませんでした。その結果、長い間刑務所に収容され、拷問もされました。ガルチェン・リンポチェのすばらしいところのひとつだと私が思うのは、どんな迫害に遭っても仏教を選び続けられたところだと思います。

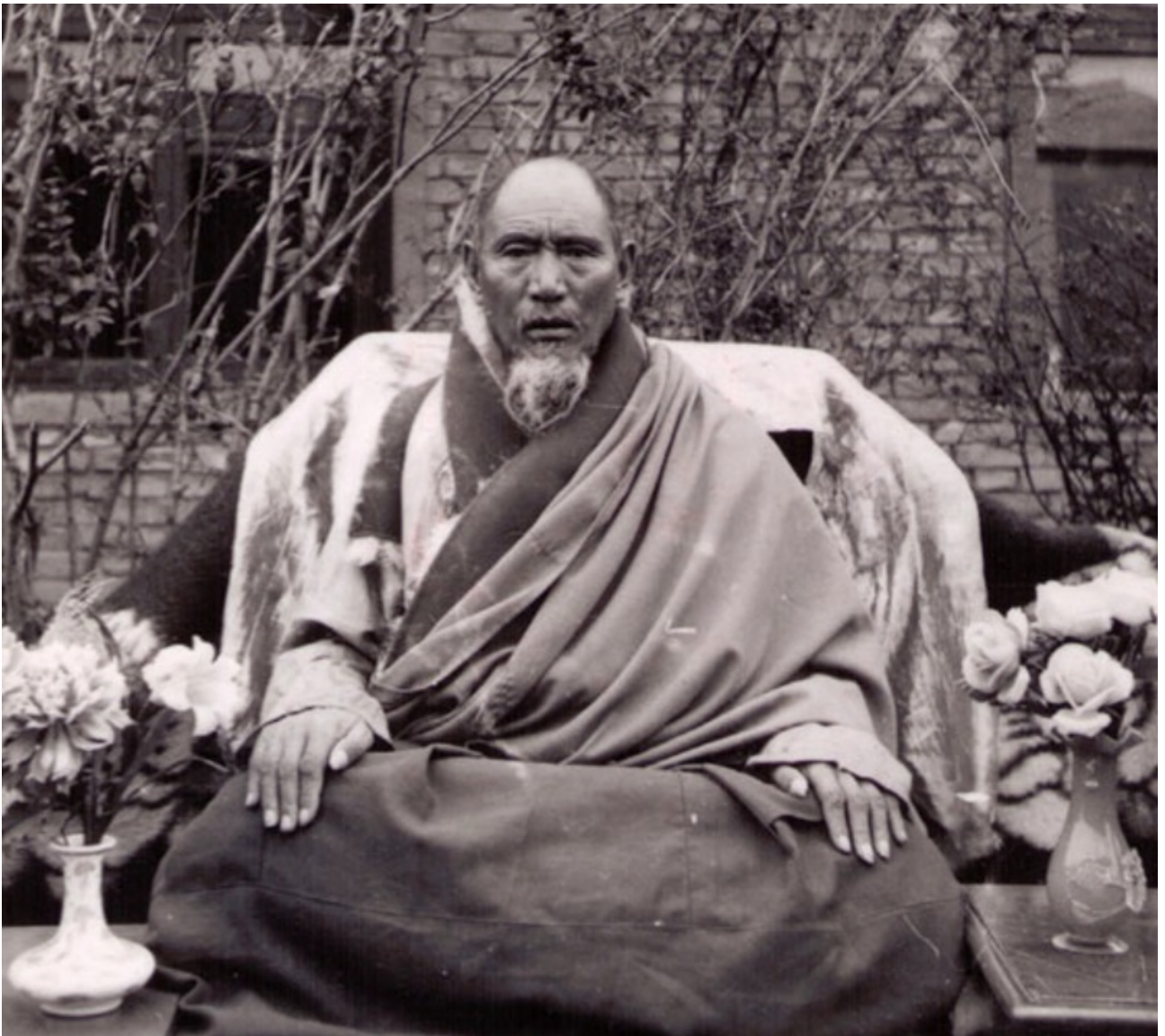
ケンポ・ムンセルとの出会い

ケンポ・リンポチェ（ニンマ派のゾクチェンの大成就者、ケンポ・ムンセル(1916-1993)）という善知識がおられ、ときどきこっそりお話しを聞くことができるように

なりました。

それでラマから仏教の教えや、「このように苦しませる者に対して、憎しみの気持ちを持ってはいけない。それらはすべて自分に原因があり、他のせいではない」という教えを受け、自分でもそう考えるようになりました。

たとえば、自分に家族が何人かいて、その中で自分ひとりがつかまり、他の多くの人たちは一緒に逃げることができた人もいます。業と因果の理ではかならず自分が起した業があって、それが自分がこのようになった原因だと考えるようになり、それまでの考え方が大きく変わりました。



ケンポ・ムンセルさまはニンマ派の成就者ですが、ガルチェン・リンポチェは根本ラマだと思い定められました。ムンセルさまはリンポチェに、ニンマ派に伝わる「ゾクチェン」という瞑想法を教えてくださいました。リンポチェは、それと、カギュー派に伝わる「マハームドラー」という瞑想法とが、本質的に同じものだという事を見抜かれました。それでいつも「マハームドラーでもゾクチェンでも」という言い方をなさいます。使っている用語が違うだけで、やっていることは同じだとおっしゃいます。

心の変容

私は、刑務所で苦しんでいるときに、考えを変えました。この苦しみの原因はなにか、敵に対して強い怒りの心があったから自分は戦争に行き、戦争で負けたので、刑務所に入りました。相手の人のせいだけでなく、自分の心にも、自分を守るとか、怒りや嫉妬心、煩惱の心があったからこそ、ここに入ってしまった。それが原因です。そうわかったとき、その因果の理を知った瞬間に、苦しみを半分に抑えることができました。

自分がこうなる原因は自分にあると思うことで、苦しみを抑制することができ、最終的には、その苦しみが自分のためになり、逆に自分を向上させる力にできます。

世の中の因果関係や苦しみについて考えてみましょう。たとえば借金のように、お金を借りたら返済しなければなりません。それと同様に、私たちが積んだ悪い煩惱のおこないによって、その代償として苦しみを味わうことになります。そして、その苦しみをあじわうことにより、以前自分が積んだ業を浄化することができます。そのように自分のためになると考えると、逆に勇気が湧きもっと苦しみがあってもいいと思え、苦しみを恐れることなく、逆に気持ちよく受け入れることができるようになります。



ドルズィン・リンポチェもおっしゃいましたが、戦争に行くとき、物に対する貪欲や敵に対する瞋恚があると業が悪くなるのです。ガルチェン・リンポチェは獄中での試練によって変容され、ひたすら他の人のために生きることを決心されました。ケンポ・ムンセルが「トンレン（自他交換）の教え」をくださったことも大きいのだと、他の場所に書いておられました。自分の苦しみをなくそうとするのではなく、他人の苦しみをなくそうとすることが大切なのだということです。ガルチェン・リンポチェは、ほんとうに熱心に修業をされたし、他の囚人たちをいつも助けたし、世の中の人々の幸福をいつも願っておられたので、ケンポ・ムンセルはガルチェン・リンポチェのことを「あの人はほんとうの菩薩の生まれ変わりだ」とおっしゃっておられたそうです。

病気で死にかけたこと

私は獄中で病気で死ぬ寸前まで行き、身体も動かすことができなくなることがあります。死んでしまうのなら、その死を恐れたとしても何の意味もないし、誰にでも死はいつか必ず訪れます。体というものは、いくら大切にしたりしても、死のときは、後に残していくほかはありません。それに対して、心はいくらでも成長させることができ、思いやりや慈しみの心を持つことができます。ですから、私もそのとき、死を恐れることなく、「死ぬなら死んでもいい。それよりも、世の中で私より苦しんでいる、無数の衆生にすこしでも役立つことができるよう、この苦しみに、その苦しんでいる者たちの代わりになりたい」そう強く思って、持っている物や配給された食べ物をすべて、周りの人たちにあげました。そして一週間ほどしたら、また徐々によくなっていきました。

そのときは、一週間くらい、ツァ・ルンという、ルン（瞑想エネルギー）を保持する修業をおこないました。それで一週間なにも食わず、体はどんどん弱っていくようでしたが、意識は明瞭になり、苦しいとか、お腹が空いたとかと覚えることはいっさいありませんでした。



ツァは「脈管」、ルンは「風」という意味で、体中の脈官に気をめぐらせる瞑想です。ガルチェン・リンポチェはこの瞑想がきわめてお上手で、サーモグラフで観察して、体温が上がっているのを証明している動画があります。ここは実際のご法話のときはもうすこし詳しいお話しがあったように思うのですが、中国の機嫌を慮ったのか、かなり省略されています。

人身の貴重さ

そのときは死なずにすみ、いまは生きています。しかしそれは時間の問題であって、いずれは死ぬしかありません。死はかならず誰にでも訪れるものです。ですから、仏教の教えによって因果の理を理解し、大きくて手の届かないものを追い求めるのではなく、いま身近にあ

る人身最勝宝の大切さを理解することが重要です。

なにも持たない貧しい人であっても、仏教的に考えれば、自分が人間に生まれるという稀有な機会を得て、人間としての優れた能力をもつ十八の条件、すなわち八有暇と十円満、を備えた人間であること、それがほんとうに理解できたなら、貧しいという思いからも解放されて、王様のような気持ちで幸せに生きることが出来ます。そのようにして人としての生というものを大切にしていって、身近なところから修業をはじめていくことが、非常に重要だと思いますし、みなさんにとっても、人として生を無駄にしないためにも、それは非常に重要であると思います。



Ontül Rinpoche, H.H.Dalai Lama & H.E.Garchen Rinpoche

やがて文化大革命が終わって、リンポチェは釈放されます。ガル寺院をはじめ、東チベットのたくさんの寺院の再建事業にとりかかられました。10年間も、横になって眠ることがなかったといわれています。低いテーブルの上に座って一晩中瞑想され、眠り込んでテーブルから落ちてしまうと、また這い上がって瞑想を続けられたそうです。

1990年代になって、はじめてインドに行かれてダライ・ラマ法王とお会いになりました。他のラマは、そういうとき、密教の教えや灌頂などをお願いするのですが、ガルチェン・リンポチェは菩薩戒を授けてくださるようお願いしただけでした。というのは、戦争の間に菩薩戒を破ったことがあると感じておられたからです。ダライ・ラマ法王は、翌日の説法で、はるばるチベットからやってきてただ菩薩戒だけを求めた転生ラマを迎えることができ、とても幸福だとおっしゃったのだそうです。

参考にしたサイト

<http://www.garchenbiography.net/garchenbriefbio.html>

<http://www.amidewa-retreat.com/web/teacher/biography-of-garchen-rinpoche>

http://www.forthenefitofallbeings.com/GarchenRinpoche_2.html

<http://www.abuddhistlibrary.com/>

